

青年期におけるアイデンティティの確立と依存性との関連

谷口美奈*¹⁾ 齋藤 眞*²⁾

本論文の目的の一つは、青年期における依存性の特徴にどのような性差があるかについて、質問紙調査によって検討することであった。もう一つの目的は、青年期にある男女それぞれが自らの依存性と向き合うことが、各自のアイデンティティ形成の四つの要素にどのように関連しているかについて、探索的に研究することであった。

関による依存性尺度について、男女それぞれで因子分析を行ったところ、因子構造としては男女ともに概ね類似した3因子（依存欲求因子、依存拒否因子と統合された依存因子）が得られた。ただし、依存欲求因子において、女子では助言や指示を求める項目の因子負荷量が高かったのに対して、男子ではそういう項目はそもそも因子に含まれなかった。むしろ男子では、助言を聞いたうえで自己判断する項目が統合された依存に含まれていた。この微妙な意味合いの違いについてのより詳しい検討が今後の課題として考えられた。

多次元自我同一性尺度による青年期の同一性感覚との関連については、男子では、依存を拒否すると同一性全体の確立に困難が生じる可能性が示唆されたのみであった。女子では、依存欲求が高いと同一性全体の確立に支障が出やすいことと依存を統合できているほど同一性全体がより確かなものとなることがわかった。また、依存を拒否する女子は、対他的同一性と心理社会的同一性の確立において困難を生じる可能性が高いことがわかった。

以上から、青年期の依存性への取り組みは、特に女子青年の同一性形成に重要な主題になることがわかった。

キーワード：青年期、アイデンティティ形成、多次元自我同一性尺度、依存性

I 問題

1 青年期のアイデンティティの確立

Erikson (1973) は自我同一性の感覚を“内的な不変性と連続性を維持する各個人の能力‘心理社会的意味での個人の自我’が他者に対する自己の意味の不変性と連続性に合致する経験から生まれた自信”だとしている。自我同一性つまりアイデンティティの確立は青年期の主題である。谷 (2001) は、特に青年期における同一性の感覚に焦点を当てて、その構造を検討できるように質問紙を作成した。そこでは、「自分が自分であるという一貫性を持っており、時間的連続性を持っているという感覚」を「斉一性・連続性」とし、「他

者からみられているであろう自分自身が、本来の自分自身と一致しているという感覚」を「対他的同一性」、「自分自身が目指すべきもの、望んでいるものなどが明確に意識されている感覚」を「対自的同一性」、「現実の社会の中で自分自身を意味づけられるという、自分と社会との適応的な結びつきの感覚」を「心理社会的同一性」と整理されている。

また、Kroger (1989) によると、青年期はそれまでの両親などの重要な他者から内的に分離し始め、自分の興味関心と社会的な現実とを協応させていく。その作業を経て、再び他者との距離感を取り戻し、最終的には自己と他者とのバランスの恒常性が確立される。杉村 (1998) はアイデンティティ形成を“自己の

* 1) 愛知学院大学大学院心身科学研究科心理学専攻

* 2) 愛知学院大学心身科学部心理学科

(連絡先) 〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12

視点に気づき、他者の視点を内在化しながら、そこで生じた自己と他者との視点の食い違いを相互調節によって解決する作業”だとまとめている。つまりアイデンティティは、個人内領域だけでなく、他者とのやり取りである対人関係領域も通して発達する。そのため、アイデンティティの確立には、他者の存在、他者との適切で良好な関係を築けることが必要になると考えられる。

アイデンティティの確立に他者や社会との関わりが不可欠であることを押さえた上で、改めて谷による4つの因子を考えると、自分の中で自分のあり方について確固たるものを感じられるようになる過程と、それが他者に認められたり社会との関わりでそれなりの位置が得られたりしていることを確信できる過程とがあると言えよう。青年期にこのアイデンティティ確立の課題に向き合うことは、自分なりの目標や自信と自分の弱さや迷いの狭間で四苦八苦することを意味する。迷いや自分の中の弱さを他者に聞いてもらい助言を求めることは、信頼をおく他者に依存することを意味する。では、アイデンティティを確立してゆくという課題に直面する青年にとって、依存性はどのように位置づけられるのであろうか。

2 青年にとっての依存性

高橋 (1968) によれば、依存性は、自立の対極概念ではなく、“人に普遍的なもので、発達に伴って消失するのではなく、より成熟したものに変容していく”とされている。この考え方を受けて関 (1982) は、依存性を「援助・慰め・是認・注意・接触などを含む、肯定的な顧慮・反応を、他者に求める傾向であり、人間に対する関心の向け方を記述する1つの概念である」と定義し、3つの変数で捉えることを提案した。すなわち、共にいて常に直接的に認めてもらえないと安定できず行動も起こせないために、とにかくも寄りかかる他者を求める「依存欲求」と、他者への依存を拒否する言動を顕在的に示したり依存することへの不安から他者を受け入れられないような徴候を示す「依存拒否」、そして、前者のような依存欲求の対象を自分の人格に内在化し自分に依存欲求があることを否定せず不安も感じずにいられる「統合された依存」とである。この研究では、統合された依存が高いと自己像の肯定度が高いことが明らかにされた。また、女子では依存の拒否と自己像の肯定度に負の相関がみられた。

久米 (2001) は依存の対象を友人に特化して研究した。そこでも、統合された依存が高いほど、自己の安

定性が高いことが明らかにされた。そして、女子のみ依存の拒否が高い人ほど、自己の安定度が低かった。また、依存の拒否は女子に比べて男子の方が有意に高かった。つまり、女子に比べて男子は依存を拒否するが、それが安定性の低さには繋がらないと考えられる。

II 目的

本研究では、関の言う「自己像の肯定度」と久米の言う「自己の安定性」を、谷の提唱したアイデンティティの4因子に置き換えて、より詳細に依存性との関連を検討したい。

谷による多面性同一性尺度では、性差は、理論的にも想定されていないし、実際の結果でも出ていない。したがって、青年期のアイデンティティの感覚の4因子については、男女に共通するものとして検討してゆく。

青年期の依存性については、「依存の対象を具体化するかどうか」という問題と「依存性の様相が男女で違う可能性がある」という問題がある。関による尺度とは異なるが、親への依存を想定した井上の研究 (1995) では、同一性達成地位にある大学生では依存欲求と独立欲求とがほどよく保たれているのに対して、同一性拡散地位にある大学生は強い独立欲求をもち、権威受容地位にある大学生は強い依存欲求をもつことが見いだされている。また、加藤・高木 (1980) によれば、女子においては親への依存が必ずしも自己概念の障害にならないことも見いだされている。

竹澤・小玉 (2004) は、欲求依存の志向性という観点から“他者との情緒的なつながりを求める”情緒的欲求と“課題達成のために具体的援助を得ることが目的”の道具的欲求の2つに分けたが、情緒的依存性・道具的依存性ともに、男子より女子の方が有意に高かった。

以上のように依存性の様相に関わって性差が想定されるため、本研究では関による依存性の3因子が男女ともに同様の構造をもつかどうかを確認したうえで、アイデンティティの感覚の4因子との関連に性差がみられるかどうかを検証してゆきたい。特に、関と久米の先行研究を受けて、依存拒否のあり方がアイデンティティの感覚のどの因子に結びつくか、そこに性差があるのかどうか、を探索してゆきたい。

なお、依存の対象は、本研究では親とか友人、あるいは恋人などと特化しないことにした。「親への依存」とすると自立のテーマがクローズアップされるし、「友

人」とすると価値や世界観の共有が前面に出てしまう。また、「恋人」にするとアイデンティティに続く親密性の課題に移行してしまう。本研究で従属変数とするアイデンティティの感覚は一般的な心理学的特性として想定しているので、依存性もあくまでも各個人の中にある一般的な傾向として測定することにした。

III 方法

1 調査協力者

調査対象は愛知学院大学心身科学部の学生147名（平均年齢19.95歳，男性66名：平均年齢20.09歳，女性81名：平均年齢19.84歳，学年2・3・4年）である。調査日はX年5月の授業の場を借りて質問紙調査を行った。

2 質問紙の構成

- 1) フェイスシート（性別，学年，年齢）
- 2) 依存性の自己評定質問紙

関（1982）によって作成された尺度。“そうである～そうでない”の5段階で回答を求めた。高橋（1970）による依存性質問紙から選んだ「依存欲求尺度」、関が予備調査の上作成した「統合された依存尺度」、「依存の拒否尺度」の3つの下位尺度からなり、項目数は各尺度13項目ずつの39項目である。

- 3) 多次元自我同一性尺度

谷（2001）によって作成された尺度。エリクソンの自我同一性概念を忠実に再現するように開発された。「自己斉一性・連続性」、「対自的同一性」、「対他的同一性」、「社会心理的同一性」の4つの下位尺度から同一性の感覚を測定する。「非常にあてはまる～全くあてはまらない」の7段階で回答を求めた。項目数は各尺度5項目ずつの20項目である。

IV 結果

1 結果の整理

依存性の自己評定質問紙について、そうである（1点）～そうでない（5点）にそれぞれ得点を与えた。多次元自我同一性尺度について、非常にあてはまる（1点）～全くあてはまらない（7点）にそれぞれ得点を与えた。また、逆転項目には表3において*マークを付けた。

2 因子分析の結果

1) 依存性の自己評定尺度39項目に対し、男女別々に最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。スクリープロット、寄与率の減衰などにより、下記のように項目と因子名が決定された。

男子は32項目、3因子に決定された（説明率は47.77%）。回転後の因子負荷量と因子間相関を表1に記す。各因子の信頼性係数も表1に示す。他の因子にも負荷量が高い項目や信頼性係数などを考慮して、一部の項目は削除された。

第1因子は「どこに行くにも誰かと一緒に行きたい」、「いつも誰かと一緒にいたい」、「誰かに味方になってもらいたい」など、他者への欲求の項目が集まっている。そのため、「依存欲求」と名付けた。

第2因子では「人に頼みごとをするのは決心がいる」、「安心して人の世話になれない」など、他者の助けを拒否したくなる項目が集まっている。そのため、「依存拒否」と名付けた。

第3因子は「自分を見守ってくれているように思う人がいるので、大事な場面も切り抜けられる」、「どんなことをしようと理解してくれると思う人がいる」など、他者の存在が自分の安定につながっている項目が集まっている。そのため、「統合された依存」と名付けた。

これらの命名は関による先行研究と概ね一致するものであった。

女子については、30項目、3因子に決定された（説明率は44.83%）。回転後の因子負荷量と因子間相関、各因子の信頼性係数を表2に記す。他の因子にも負荷量が高い項目や信頼性係数などを考慮して、一部の項目は削除された。

第1因子は「誰かに味方になってもらいたい」、「重要な決心をするときは、いつも人の意見が聞きたい」、「誰かに『これでいいですか』と聞きたい」、など、他者への欲求の項目が集まっている。負荷の高さに違いはあるものの全般的な項目のまとまり具合としては概ね男子と同じであったため、男子と同じ「依存欲求」と命名した。

第2因子では「人に何かをやってもらうのは苦手だ」、「誰かに頼る立場になると、どうも落ち着かない」など、他者の助けを拒否したくなる項目が集まっている。因子負荷量の高さに応じて代表となる項目に違いはあるものの項目の集まり方は男子と概ね同様であったため、男子と同じ「依存拒否」と名付けた。

第3因子は「心の支えになってくれる人がいる」、「思

表1 依存性自己評定質問紙 (男子) の因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン)

項目内容	F1	F2	F3
第1因子 依存欲求 ($\alpha=.911$)			
4 できることなら, どこに行くにも誰かと一緒に行きたい	.805	-.127	-.209
16 できることならいつも誰かと一緒にいたい	.791	.026	-.183
28 何かにつけて, 誰かに見方になってもらいたい	.766	.129	.038
31 悪い知らせ, 悲しい知らせなどを受け取る場合には, 誰かに一緒にいてもらいたい	.763	.075	-.118
39 病気の時や, ゆううつな時には, 誰かに同情してもらいたい	.719	-.139	.032
29 困っている時や悲しい時には, 誰かに気持ちをわかってもらいたい	.678	-.005	.374
10 人から, 「元気ですか」などと気を配ってもらいたい	.674	.016	.122
17 何かをする時には, 誰かに気を配ってはげましてもらいたい	.668	.121	.308
第1因子 依存拒否 ($\alpha=.868$)			
12 人に頼みごとをするのは, どんな時でも非常な決心がいる	.048	.760	.205
36 安心して人の世話になれない方だ	.014	.724	-.190
27 誰かに頼る立場になると, どうも落ち着かない	-.071	.696	-.047
6 友達には, 絶対に借りをつくりたくない	-.284	.620	.144
8 人の世話になるのは恥ずかしいと思う	.317	.609	.064
37 好意を示されると, 戸惑うことが多い	.250	.593	-.026
2 どんな困った時でも, 人に頼らない方だ	-.329	.582	.040
23 恩返しできないなら, 人に援助を求めるのは, ためらわれる	-.025	.566	-.056
第3因子 統合された依存 ($\alpha=.890$)			
14 自分を見守ってくれているように思う人がいるので, 大事な場面も切り抜けられる	-.072	.074	.849
3 私がどんなことをしようと理解してくれる, と思う人がいる	-.153	-.039	.807
35 自分の信頼できる人がいるので安心だ	.056	.139	.776
26 心の支えになってくれる人がいる	.025	.117	.741
7 あの人になら少々無理を言ってもいい, と思う人がいる	-.248	.003	.685
1 うれしいこと, 楽しいことは, まず誰かに報告したい	.130	.021	.567
25 親しい友人や家族にはいざという時には, 無理な頼みごともあるだろう	-.168	-.338	.538
9 人は, ささえ合って生きていくものだと感じる	-.098	-.312	.526
32 思い出だけで, 心がやすらくなるような人がいるので, 落ち着いていられる	.207	-.027	.519
13 自分と相手の立場を尊重しつつ, 必要な時にはうまく頼ったり頼られたりするほうだ	.230	-.004	.509
21 直接手助けしてもらわないが, 誰かに話をする事で自分の判断がしやすくなることがある	.040	-.126	.432
34 最後は自分で決めるにせよ, 困った時には, 信頼できる人の意見も求めてみる	.225	.035	.399
	因子間相関		
	F1	F2	F3
		.404	-.434
	F2		-.217

い出すだけで心がやすらくなるような人がいるので, 落ち着いていられる」など, 他者の存在が自分の安定につながっている項目が集まっている。負荷の高さで中心項目は違って見えるが全体の集まり方は男子とほぼ同様であったため, 男子と同じく“統合された依存”と名付けた。

女子の因子の命名も関の先行研究と概ね一致するものであった。

男女それぞれの依存性の特徴に関わって, 因子名は同じにしてよいと判断された。したがって, 因子構造としては男女で大きな違いはないと考えられた。ただし, “依存欲求”については, 女子がより具体的な助言を志向するのに対して, 男子は行動面での付き添い

を志向することに重点が置かれているようであった。そして, 助言を志向するような項目は男子においては“統合された依存”に含まれる傾向がありそうであった。因子構造はほぼ同じであったが, 上記のようなニュアンスの違いを考慮して, 同一性との関連の検討には男女別々に分析・考察することにした。

2) 多次元自我同一性尺度については, もとものの因子に性差は想定されていないため, 男女のデータをまとめて, 最尤法, プロマックス回転による因子分析を行った。スクリープロット, 寄与率の減衰などにより, 17項目, 4因子に決定された(説明率は61.41%)。他の因子に負荷量が高かった項目(51「現実の社会の中で自分の可能性を十分に発揮できると思う」, 55「自

表2 依存性自己評定質問紙(女子)の因子分析結果(Promax 回転後の因子パターン)

項目内容	F1	F2	F3
第1因子 依存欲求 ($\alpha=.886$)			
28 何かにつけて、誰かに味方になってもらいたい	.791	.025	-1.000
33 重要な決心をする時は、いつも、人の意見が聞きたい	.778	.232	.147
22 何か迷っている時には、誰かに「これでいいですか」と聞きたい	.768	.089	.130
39 病気のときや、ゆううつな時には、誰かに同情してもらいたい	.734	.087	-.068
5 一人で決心がつきかねるときには、誰かの意見に従いたい	.692	.103	.101
17 何かをする時には、誰かに気を配ってはげましてもらいたい	.685	-.121	-.158
24 難しい仕事をする時には、できたら誰かと一緒にしたい	.606	-.012	-.056
29 困っている時や悲しい時には、誰かに気持ちをわかってもらいたい	.597	.087	.061
16 できることならいつも誰かと一緒にいたい	.522	-.227	-.097
10 人から「元気ですか」などと気を配ってもらいたい	.455	-.099	-.069
4 できることなら、どこに行くにも誰かと一緒にいきたい	.431	-.273	-.131
第2因子 依存拒否 ($\alpha=.890$)			
38 自分のために、人に何かやってもらうのは苦手だ	.071	.776	.036
27 誰かに頼る立場になると、どうも落ち着かない	-.092	.700	-.101
8 人の世話になるのは恥ずかしいと思う	.056	.670	-.001
6 友達には、絶対に借りをつくりたくない	.235	.670	.091
23 恩返しできないなら、人に援助を求めるのは、ためらわれる	.048	.667	.100
37 好意を示されると、戸惑うことが多い	-.050	.664	-.049
12 人に頼みごとをするのは、どんな時でも非常な決心がいる	.007	.655	-.160
15 親しい間柄の人にも、甘えることのない方だ	-.342	.600	.186
19 自分のことを誰かに相談するのは、何か不安である	.314	.550	-.026
36 安心して人の世話になれない方だ	-.069	.542	-.224
11 自分のことは、どんなことがあっても自分ひとりでないと気がすまない	-.139	.445	.058
2 どんな困った時でも、人に頼らない方だ	-.327	.435	-.243
第3因子 統合された依存 ($\alpha=.820$)			
26 心の支えになってくれる人がいる	-.058	.152	.753
32 思い出すだけで、心がやすらかになるような人がいるので、落ち着いていられる	-.054	.030	.729
35 自分の信頼できる人がいるので安心だ	.011	-.085	.713
20 誰かのことを思い浮かべて、元気を出すことがある	.104	.041	.637
14 自分を見守ってくれているように思う人がいるので、大事な場面も切り抜けられる	-.117	-.082	.581
3 わたしがどんなことをしようと理解してくれる、と思う人がいる	-.171	-.282	.470
9 人は、ささえ合って生きていくものだと感じる	.204	-.130	.456
	因子間相関		
	F1	F2	F3
		-.155	-.177
	F2		-.324

分らしく生きてゆくことは、現実の社会の中では難しいだろうと感じる」、59「自分の本当の能力を生かせる場所が社会にはないような気がする」)を削除した。回転後の因子負荷量と因子間相関、信頼係数を表3に表す。

第1因子は、自分が自分であると感じる項目が集まっている。そのため、「自己斉一性」と名付けた。第2因子は、他者が自分をわかっていると感じる項目が集まっている。そのため、「対他的同一性」と名付けた。第3因子は、自分のことがはっきりわかっていると感

じる項目が集まっている。そのため、「対自的同一性」と名付けた。因子4は、社会の中の自分を感じる項目が集まっている。そのため、「心理社会的同一性」と名付けた。これらの命名は先行研究と概ね一致するものであった。

3 分散分析の結果

男女それぞれにおいて、依存欲求、依存拒否、統合された依存の3因子について、各因子の得点が上位25%前後を高群(H)、下位25%前後を低群(L)その

表3 多次元同一性尺度の因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン)

項目内容	F1	F2	F3	F4
第1因子 自己斉一性 ($\alpha=.89$)				
*48 いつの間にか自分が自分でなくなってしまったような気がする	.82	-.10	-.14	.17
*56 「自分がない」と感じることもある	.77	-.10	-.01	.07
*52 今のままでは次第に自分を失っていってしまうような気がする	.77	-.06	-.11	.11
*57 自分が何を望んでいるのかわからなくなることがある	.68	.01	.28	-.07
*53 自分が何をしたいのかよくわからないと感じる時がある	.68	.06	.26	-.20
*40 過去において自分をなくしてしまったように感じる	.67	.15	-.01	-.13
*44 過去に自分自身を置き去りにしてきたような気がする	.65	.06	-.01	-.01
第2因子 対他的同一性 ($\alpha=.87$)				
*42 自分の周りの人々は、本当の私をわかっていないと思う	-.10	1.00	.06	-.09
*54 本当の自分は人には理解されないだろう	.12	.74	-.10	.03
46 自分は周囲の人々によく理解されていると感じる	-.25	.73	.13	.11
*50 人に見られている自分と本当の自分は一致しないと感じる	.22	.58	-.11	.00
*58 人前での自分は本当の自分ではないような気がする	.36	.56	-.06	-.02
第3因子 対自的同一性 ($\alpha=.89$)				
45 自分がどうなりたいかははっきりしている	.04	-.09	.85	.06
41 自分が望んでいることがはっきりしている	-.08	.07	.84	-.03
49 自分のすべきことがはっきりしている	.08	-.02	.83	.05
第4因子 心理社会的同一性 ($\alpha=.87$)				
43 現実社会の中で、自分らしい生き方ができると思う	.05	.00	.01	.90
47 現実の社会の中で、自分らしい生活が送れる自信がある	.05	.04	.08	.71
	因子間相関		F2	F3
* は逆転項目	F1		.57	.46
	F2			.31
	F3			.57

中間を中群 (M) と名付け、その各群と自己斉一性、対他的同一性、対自的同一性、心理社会的同一性の4因子との交互作用を確かめるために、依存性各群 (被

験者間) × 同一性4因子 (被験者内) の3 × 4分散分析を行った。各群の度数、各因子の平均値、標準偏差は表4～11に表す。

表4 男子依存欲求 × 同一性4因子の平均、標準偏差

	度数	自己斉一性	対他的同一性	対自的同一性	心理社会的同一性
H	17	3.69(1.55)	4.47(1.78)	3.88(1.29)	3.85(1.64)
M	32	4.14(1.21)	3.94(1.20)	4.13(1.29)	4.04(1.45)
L	17	4.92(0.90)	4.68(0.90)	4.24(1.57)	4.59(1.11)
合計	66	4.23(1.30)	4.27(1.33)	4.09(1.49)	4.14(1.43)

() は標準偏差

表5 男子依存拒否 × 同一性4因子の平均、標準偏差

	度数	自己斉一性	対他的同一性	対自的同一性	心理社会的同一性
H	17	3.99(1.49)	3.81(1.28)	3.92(1.28)	3.44(1.58)
M	33	4.34(1.31)	4.13(1.24)	4.06(1.53)	4.21(1.41)
L	16	4.25(1.11)	5.02(1.32)	4.35(1.66)	4.72(1.00)
合計	66	4.23(1.30)	4.27(1.33)	4.09(1.49)	4.14(1.43)

() は標準偏差

表6 男子統合された依存×同一性4因子の平均, 標準偏差

	度数	自己斉一性	対他的同一性	対自的同一性	心理社会的同一性
H	15	4.64(0.83)	4.92(1.18)	4.06(1.62)	4.40(1.20)
M	31	4.09(1.16)	4.39(1.05)	4.10(1.32)	4.34(1.33)
L	20	4.14(1.74)	3.59(1.56)	4.12(1.70)	3.62(1.66)
合計	66	4.23(1.30)	4.27(1.33)	4.09(1.49)	4.14(1.43)

() は標準偏差

表7 男子学生の依存性各群の同一性総平均

	L	M	H
依存欲求	3.97(0.24)	4.06(0.17)	4.60(0.24)
依存拒否	3.79(0.24)	4.18(0.17)	4.58(0.24)
統合された依存	4.50(0.26)	4.22(0.18)	3.86(0.22)

() は標準偏差

表8 女子依存欲求×同一性4因子の平均, 標準偏差

	度数	自己斉一性	対他的同一性	対自的同一性	心理社会的同一性
H	17	3.40(1.46)	3.96(1.67)	3.37(1.81)	3.91(1.58)
M	44	4.24(1.29)	4.44(1.13)	4.23(1.38)	4.03(1.52)
L	20	4.84(1.31)	5.06(1.34)	4.75(1.63)	4.35(1.57)
合計	81	4.21(1.40)	4.49(1.34)	4.18(1.59)	4.09(1.53)

() は標準偏差

表9 女子依存拒否×同一性4因子の平均, 標準偏差

	度数	自己斉一性	対他的同一性	対自的同一性	心理社会的同一性
H	20	3.65(1.48)	3.63(1.14)	3.83(1.54)	3.58(1.31)
M	41	4.30(1.30)	4.46(1.22)	4.45(1.32)	4.00(1.50)
L	20	4.59(1.43)	5.42(1.22)	3.97(2.08)	4.78(1.61)
合計	81	4.21(1.40)	4.49(1.34)	4.18(1.59)	4.09(1.53)

() は標準偏差

表10 女子統合された依存×同一性4因子の平均, 標準偏差

	度数	自己斉一性	対他的同一性	対自的同一性	心理社会的同一性
H	12	5.37(1.22)	5.85(1.11)	5.61(1.37)	6.21(0.92)
M	45	4.32(1.14)	4.49(1.01)	4.29(1.28)	4.14(1.20)
L	24	3.42(1.51)	3.83(1.53)	3.25(1.68)	2.91(1.10)
合計	81	4.21(1.40)	4.49(1.34)	4.18(1.59)	4.09(1.53)

() は標準偏差

表11 女子学生の依存性各群の同一性総平均

	L	M	H
依存欲求	3.66(0.28)	4.23(0.18)	4.79(0.26)
依存拒否	3.67(0.26)	4.30(0.18)	4.68(0.26)
統合された依存	5.76(0.27)	4.31(0.14)	3.35(0.19)

() は標準偏差

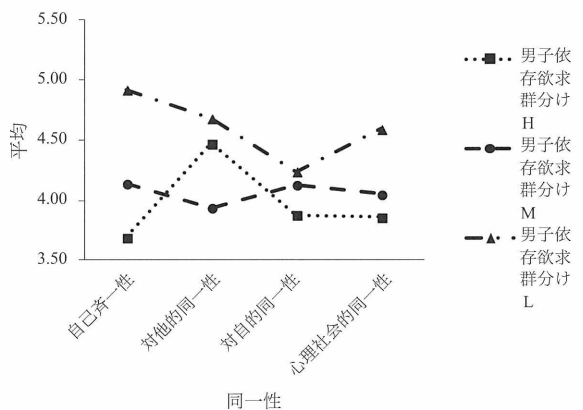


图1 男子依存欲求×同一性

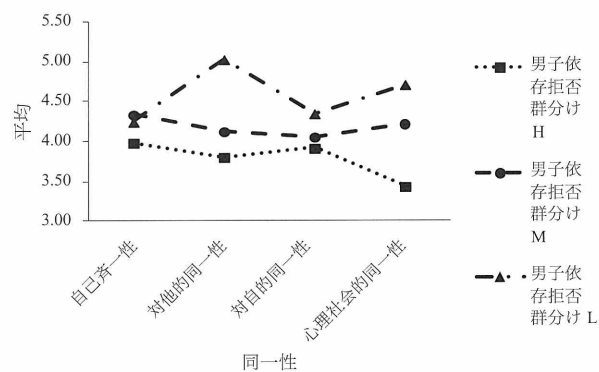


图2 男子依存拒否×同一性

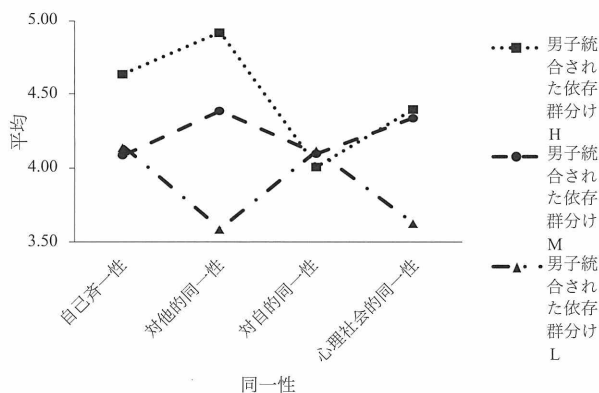


图3 男子統合された依存×同一性

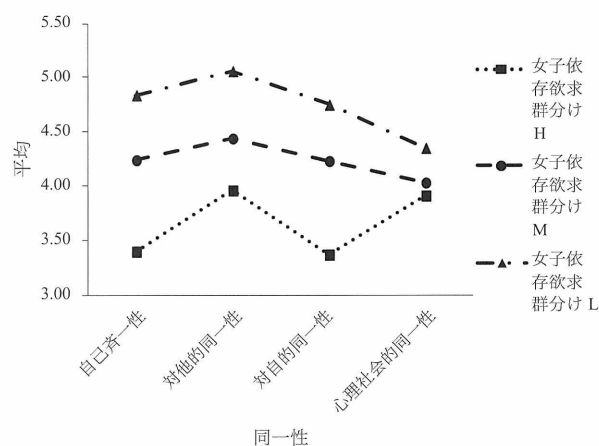


图4 女子依存欲求×同一性

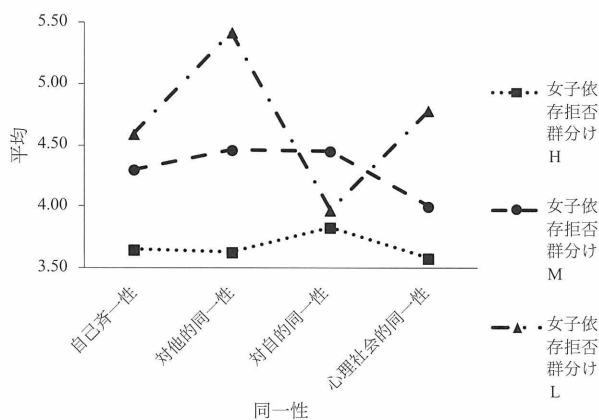


图5 女子依存拒否×同一性

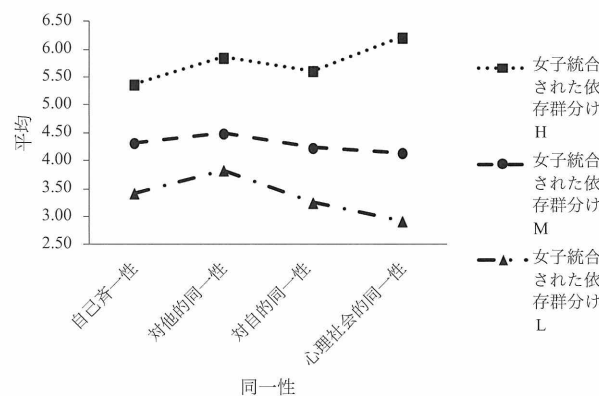


图6 女子統合された依存×同一性

1) 男子

(1) 依存欲求×同一性4因子 (表4・図1)

依存欲求×同一性4因子の交互作用は有意ではなかった ($F(5.8,183.5)=1.33, n.s.$). 依存欲求の各群間にも主効果がみられなかった ($F(1,63)=2.2, n.s.$). 同一性4因子でも主効果はみられなかった ($F(2.9,183.5)=.72, n.s.$).

(2) 依存拒否×同一性4因子 (表5・図2・表7)

依存拒否×同一性4因子で交互作用は有意ではなかった ($F(5.8,183.3)=1.26, n.s.$). 依存拒否の各群間の差には有意傾向がみられた ($F(1,63)=2.73, p=.07$). 念のため Bonferroni による多重比較を行ったところ、同一性全体の未確立得点において、依存拒否高群が低群よりも高い可能性が示唆された ($p=.068$). 同一性4因子では主効果はみられなかった ($F(2.9,183.3)=.71, n.s.$).

(3) 統合された依存×同一性4因子 (表6・図3)

統合された依存×同一性4因子の交互作用は有意ではなかった ($F(6,189)=1.73, n.s.$). 統合された依存の各群間にも主効果はみられなかった ($F(1,63)=1.83, n.s.$). 同一性4因子でも主効果はみられなかった ($F(3,189)=.6, n.s.$).

2) 女子

(1) 依存欲求×同一性4因子 (表8・図4・表11)

依存欲求×同一性4因子の交互作用は有意ではなかった ($F(5.6,217.4)=1.15, n.s.$). 依存欲求の各群間にも主効果がみられた ($F(1,78)=4.02, p<.05$). Bonferroni による多重比較を行ったところ、同一性全体の未確立得点において、依存欲求高群が低群よりも高かった ($p<.05$). 同一性4因子の間にも有意傾向がみられた ($F(2.8,217.4)=2.41, p=.07$). 念のため Bonferroni による多重比較を行ったが、各群間の差には有意傾向はみられなかった.

(2) 依存拒否×同一性4因子 (表9・図5)

依存拒否×同一性4因子で交互作用が有意であった ($F(5.8,225.4)=3.81, p<.01$). 交互作用がみられたため単純主効果の検定を行ったところ、依存拒否が高い群で対他的同一性での揺れが自己斉一性より5%水準で有意に高く ($p=.018$), また、心理社会的同一性での揺れが対自的同一性より5%水準で有意に高かった ($p=.019$). また、対他的同一性での揺れが、依存拒否が高い群が低群から中群を経て有意に高くなっていることがわかった (中群との比較では $p=.04$, 低群との比較では $p=.00$, 中群と低群との間では $p=.01$). 心理

社会的同一性での揺れでは、依存拒否が高い群は低い群に比べて5%水準で高かった ($p<.05$).

(3) 統合された依存×同一性4因子 (表10・図6・表11)

統合された依存×同一性4因子の交互作用は有意ではなかった ($F(5.6,217)=1.79, n.s.$). 統合された依存の各群間に主効果がみられた ($F(1,78)=26.47, p<.01$). Bonferroni による多重比較を行ったところ、同一性全体の未確立得点において、統合された依存低群は高群から中群を経てそれぞれ1%水準で高くなっていることがわかった ($p<.01$). 同一性4因子では主効果はみられなかった ($F(2.8,217)=1.8, n.s.$).

V 考察

上記結果から、依存を拒否している男子青年は、全体としての同一性確立に少し苦勞している可能性が示唆されたが、概して「自分の依存欲求をどのように統合するか」は、男子青年の同一性確立には大きな主題になってこないことが、わかった。他方、女子青年にとっては、①全体としての同一性確立にとって依存欲求が高いことが引っかけりになると感じられていること；②しかし、依存を拒否すると、対他的同一性や心理社会的同一性の確立に多少なりとも支障を来すとも感じられてしまうこと；③それゆえに、依存を統合できてゆくことが同一性全体の確立での主題の一つになると感じられていること；がわかった。

本研究の男子青年の同一性の感覚にとっては、自分が人に依存していること自体は対処すべき課題にはならず、結果、そういう依存欲求を受け入れて統合することも大きな主題にはならないようであった。依存を拒否したり依存欲求に不安を感じたりする男子青年で全体としての同一性は確立されにくい可能性が示唆された点については、依存欲求を強く拒否する頑なさよりもむしろ、自分の内的確信にせよ対人関係での安定性にせよ、どこか自分に自信が持てない面が影響を及ぼしている可能性も考えられる。

他方、女子青年にとっては、自らの依存性への取り組みが、この時期の同一性の感覚を確かなものにしてゆくの重要な課題になっていると考えられる。関の調査から年月が経って女子青年の意識や社会からの要請も変わってきているせいかもしれないが、本調査では、関での結果とは異なって、自分の依存欲求が同一性の感覚全体の確立に妨げになっていると感じられているようであった。興味深いことに、この依存欲求の

因子で女子青年に特徴的だったのは、「人の意見や承認を得たい」とまとめられる項目が女子青年にだけ入っていたことである。因子分析の結果で少し触れたように、男子青年にとっては、物理的にも心理的にも寄り添ってもらえることが依存欲求の中心になっているのに対して、女子青年にとっては、それらに加えて何か意見や承認をもらうことも依存欲求のもう一つの核になっている（しかも各項目の因子負荷量が比較的高い）。自分の意思で自分なりの手応えを掴みそれを周囲に認めてもらうことが青年期の同一性確立の主題になっていると言い換えた場合、他人に意見を求めてそれ（極論すれば親の因習的な価値観）に従ってしまうことは、女子青年にとっては、自分の同一性の感覚全体を確かなものにしてゆく方向からは後退すると感じられるのかもしれない。

しかし、そういう依存欲求を拒否する場合、他者の意見とは異なる自分ならではの価値観で社会にそれなりに場所を見いだせるという自信ももてないし、それでも強がらざるを得ない自分を他者に認めてもらえるという確信もまだもてない。これが、女子青年にとって、心理社会的同一性や対他的同一性の感覚において動揺しやすいという結果に関係すると考えられる。

おそらく、女子青年にとっては、上記のように否定的に感じられる依存欲求と収まりどころを見いだせない依存拒否との間を揺れながら、他者に意見や承認をもらいつつ自分を見失わず、依存する自分も受け入れられる余裕を持てるようになることが、同一性の感覚全体を確かなものにするに直結するのであろう。

これを裏返して男子青年に重ねて考えてみると、男子青年の「統合された依存」には「最後は自分で決めるにせよ、困った時には、信頼できる人の意見を求めてみる」や「直接手助けしてもらわないが、誰かに話をする事で自分の判断がしやすくなることもある」という項目が含まれている。「自分で決める」や「自分の判断」というところで「統合された依存」に含まれたと考えられるが、「人の意見を聞いたり、人に話を聞いてもらったりする」という依存的な行動も含まれている。男子青年にとっては、人を頼りにする部分が引っかけなく「自分の決定や判断」に繋がってゆくのかかもしれない。だからこそ、ことさらに「自分の依存性とどう取り組むか」ということが大きな主題にならないのかもしれない。これらについては、より焦点を絞った研究を進めてゆくことが必要とされよう。

引用・参考文献

- 土居健郎 (1971) 「甘え」の構造 弘文堂
- 江口恵子 (1966) 依存性の研究 教育心理学研究, **14**, 45-58
- Erikson, E. H (1959) *Identity and the life cycle*. New York: W. W. Norton & Company. (小此木啓吾訳編 (1973) 自我同一性 誠信書房)
- 井上忠典 (1995) 大学生における親との依存—独立の葛藤と自我同一性の関連について 筑波大学心理学研究, **17**, 163-173
- 伊藤裕子・北島順子 (1980) 既婚女性における依存性 教育心理学研究, **28**, 319-323
- 加藤隆勝・高木秀明 (1980) 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, **28**, 336-340
- 久米禎子 (2001) 依存のあり方を通してみた青年期の友人関係—自己の安定性との関連から— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 第 47 号, 488-499
- Kroger, J. (1989) *Identity in adolescence: The balance between self and other*. London: Routledge
- 大崎園生 (2005) 自己の感情体験様式と共感性からみる青年期のアイデンティティについて 経営研究, **19**, 1, 37-54
- 関智恵子 (1982) 人格適応面からみた依存性の研究: 自己像との関連において 臨床心理事例研究, **9**, 230-249
- 杉村和美 (1998) 青年期におけるアイデンティティの形成: 関係性の観点からのとらえなおし 発達心理学研究, **9**, 1, 45-55
- 高橋恵子 (1968a) 依存性の発達の研究 I—大学生女子の依存性— 教育心理学研究, **16**, 7-16
- 高橋恵子 (1968b) 依存性の発達の研究 II—大学生との比較における高校生女子の依存性— 教育心理学研究, **16**, 216-226
- 高橋恵子 (1970) 依存性の発達の研究 III—大学生・高校生との比較における中学生女子の依存性— 教育心理学研究, **18**, 65-75
- 竹澤みどり・小玉正博 (2004) 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討 教育心理学研究, **52**, 310-319
- 谷冬彦 (2001) 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成— 教育心理学研究, **49**, 265-273
- 若島孔文・都築誉史・松井博史 (2005) 心理学実験マニュアル—SPSS の使い方からレポートへの記述まで— 北樹出版

附記

本論文は、谷口の卒業研究を元にして齋藤が再分析し大幅に改訂・加筆したものである。したがって、本論文の文責はすべて齋藤にあるが、研究のためのデータ収集などの

青年期におけるアイデンティティの確立と依存性との関連

あらゆる努力は谷口に依拠する。谷口による調査に協力してくれた愛知学院大学の学生諸氏と貴重な授業時間を割い

ていただいた松岡弥玲先生にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

最終版平成27年9月30日受理

Relations between the Senses of Identity Formation and Dependency in Adolescents

Mina TANIGUCHI and Makoto SAITO

Abstract

The purposes of this study were to examine the traits of dependency of adolescents according to the difference of their sex and to investigate the relations between the dependency-traits and senses of identity formation in adolescence. The results found as follows. Firstly, both the male participants and female participants would have roughly similar structures of dependency which were composed of three factors—a desire to depend, a refusal to depend and an integrated dependence. Secondly, the results suggested that the female participants would have the tendency of depending to get some advice and directions whereas the male participants would have the tendency of dependence to be accompanied by others both physically and psychologically. Furthermore, male participants might regard the desire to get advice as one of integrated dependence. Finally, it would not be significant that the male participants would question their dependency to establish their identity. The female participants who wanted to depend on others would have difficulty in establishing their own identity. And those females who had integrated their dependence would establish their own identity. Furthermore those females who refused their own dependence could not stabilize the sense of interpersonal identity and psychosocial identity.

Keywords: adolescence, identity formation, multidimensional ego identity scale (MEIS), dependency